

第二百十四話 官吏の亀鑑！（最後の官選知事島田勲）

大東亜戦争で唯一日本本土において行われた地上戦が沖縄戦であり、多数の県民が巻き込まれた。S20年3月下旬（上陸は4月1日）から6月23日まで、牛島中将率いる第32軍（2個師団、1個旅団）と、第10軍司令官バックナー中将麾下の軍団及び水陸両用部隊が死闘を繰り返した。この戦闘で沖縄県民の死者・行方不明者は12万人以上であるとされる。

米軍の沖縄上陸必至と言われる昭和20年1月沖縄県知事となったのが島田勲（あきら）であり、彼は、軍と調整し、県民保護に心血を注ぎ、摩文仁丘で消息を絶つまで、自然壕を移動しつつ行政を指揮した。当時の内相は、島田を「官吏の亀鑑」と呼んだという。



1 島田知事経歴

明治34年神戸市出身、三高から東大法科、大正14年内務省入省、知事就任前は大阪府内政部長、学生時代は野球に熱中、ラグビーも

2 知事就任を即受諾

周囲の反対があるも、「誰かが行かねばならぬとしたら、言われた俺が断る訳にはいかぬ」と受諾し、日本刀と青酸カリを懐中に、死を覚悟して沖縄へ。

3 第32軍、海軍陸戦隊との密接な調整

参謀長長少将とは上海事変以来懇意でもあり、軍の状況を承知し、食糧確保の要請を受けた。島田知事は台湾から6ヶ月分の食料を確保し、酒・煙草の特別放出を要求するなどを精力的に行い、県民の信頼を得た。軍とは積極的に関係改善に努め、その成果は上がった。

海軍陸戦隊の太田海軍少将とは、密接にコンタクトを取り合い、肝胆相照らす仲であったと云われる。

4 地下壕を移動しながらの行政指揮

空襲に伴い、県庁を首里に移転、地下壕で執務開始した。爾後、戦局の推移に伴い壕を移転しつつ指揮した。難局にあっても、常に県民に寄り添う姿勢で、

5 県民保護と軍の基本方針の乖離

- ・ 軍は、県民の県外若しくは北部への疎開を求めていたが、軍と行動を共にしたいと考える県民も多かった。
- ・ 地上部隊の首里撤退に際しては、反対意思を示し、憤慨したと云う。軍は知念半島備蓄の食糧・物資を避難民に対し開放すべく命令するも、戦況上これが実現は出来なかった。

6 知事の最後

6月9日、島田に同行した県職員・警察官に対し、「どうか命を永らえて欲しい。」と訓示して、県及び警察組織の解散を命じた。6月26日、荒井警察本部長と摩文仁の丘を出たきりで消息を絶った。今日に至るまで遺骨は発見されていない。

7 島田に対する内務大臣賞詞と顕功賞の授与

7月9日、安倍源基内務大臣は、「其ノ志、其ノ行動、真ニ官吏ノ亀鑑ト謂ウベシ」と讃えて、行政史上初の内務大臣賞詞と顕功賞を贈った。前代未聞な事であった。

- * 国土戦において、国民（住民）保護を如何に行うかは極めて重要な課題である。軍の作戦と住民保護を如何に節調するか、その調整システムは？住民と作戦部隊が混在するのは回避すべきだろう。住民保護における国土防衛部隊の役割とは何か？事前の周到な計画なしには確実な避難は困難だろう。何れにしても、沖縄戦は我々に重い課題を突き付けている。

（第二百十四話 了）